

子育てチャンネル

国保東川町立診療所長
木下 透
TOORU KINOSHITA



役場の広報担当者から「期待しています」と言われましたが、私は三原真琴先生のように教育者でも画家でもありませんので、何を書いたらいいのが戸惑っています。

お陰様で東川に来た当時小学校に入学したばかりの上の娘も中3になりましたし、下の娘も小6で、まもなく修学旅行に出発します。傍からみれば子育て真最中なのでしょうが、こ多分にもれずうちの子育てはすべて妻に任せっきりであります。

言い訳になるようですが、私は3歳年下の弟と2人の男兄弟の中で育ち、子供の頃は北松山の清流利別川で毎日バケツいっぱいウグイやイワナを釣って遊んでいましたし、江差の鷗島の海水浴場では1m位の海底にころころ転がっていたエゾムラサキウニを採っては岸壁で石で割ってお昼御飯にしていました。

旭川の六合中学校に転校して来て頭を丸坊主にされてからはさすがに海や川には行けなくなりましたが家の近くの北鎮小学校のグラウンドで「対決」と称して弟と二人で暗くなるまで、投げて打って走って取る野球をしていたので弟は大学で準硬式野球部に入部しました。

そのような訳で、まますや雛祭り、セーラームーンやメザイク()は初めての経験で、「子育てチャンネル」と言われても、私は自分の2人の娘の気

持ちすらいまだによくわかりません。怒ることもしないのでなるべく邪魔にならないように、嫌われないように接してきた典型的な駄目な父親でありました。

しかしそれではいけないと思わせる我が国犯罪史上最少年齢の女子児童による同級生斬殺事件が佐世保市で起きてしまいました。この原稿を書いている時点では、6月1日の事件発生から2週間が経過して11歳女児の精神鑑定の実施が正式決定されたところですが、日本中の涙を誘った被害者の父親の手記に象徴されるようになんとも痛ましい出来事でした。

今年の2月頃までは共にバスケットボール部で活躍していて、とても仲が良かったのに、勉強との両立が難しいのでやめさせます」とのこと。週3日の部活がなくなってインターネットにのめり込んだそうです。家庭にも学校にも居場所のない孤立感がこの惨劇の引き金になったという新聞報道の解説ではありますが、いくつか学校教育や児童心理学の専門家による話も載っていましたので抜粋してみたいと思います。

北大大学院教育学研究科の田中教授は、「子供たちが過程を軽んじて場当たり的になっている。自分の気持ちを表現する時に『むかつく』『嫌い』などのワンフレーズですませる子供たちが目立ち、自己表現が未熟で悩

みを他人に相談できず、1人の世界に入り込みがちである」と指摘しておられます。

また道教育大学院で学校臨床心理学を教える庄井助教は、「数年前から子供たちが妙に明るく、悩む姿を友達に見せることを恐れ人知れず挫折感を重ねていて、行き過ぎる感情が爆発しかねない」と考えていたそうです。

私が仕事としている地域医療の面でも介護保険制度の制定を始めとしているいろと見直しが図られてはいるのですが、圧倒的に増大する高齢

心の健康、体の健康

(佐世保の事件について考える)

者の需要に対し十分に対応し続ける事が困難になってきています。結果より過程を重視することの大切さが医療の本質であるのは、解つてはいるのですが、この事件を振り返って改めて学校の先生方も大変だと思えます。

三宅良昌教育長がよくこれからの教育は質の問題だと話されていますが、すべての生徒に心を配って明るく楽しい学校生活を送れるようになるしくお願い致します。

メザイク…まぶたに貼って二重まぶたにする道具

木下 透 きのしたとおる
平成8年より東川町立診療所に勤務。日本外科学会・日本消化器外科学会認定医、日本消化器病学会・日本肝臓病学会専門医。上川郡中央医師会副会長。アリと蜂の生態にはかなり詳しいらしい。

